

3.11 自らを、そして日本を視る

— 多彩な写真集を前にして —

熊切圭介 (副会長)

記録する側とされる側

「この写真展を観て、改めて自分がどのくらい恵まれているか、を強く感じた」「生きたくとも生きられなかった方々の無念の想いを、生きられた私たちが大事に受け継いで生きていかなければならないと思った」「震災を直接経験したこともあり、写真を見て改めてその悲惨な想いを起こした。忘却することなく伝えていかなければと思っています」「未来に向かう若者や子どもの目に輝きを見ることが出来て、少しほっとした」。

写真家協会の東日本大震災復興支援事業である写真展「生きる」の会場に残された感想文は、東京、仙台の違いはあれ、率直で実感のこもったものだった。東京の会場には、陸前高田で被災し家屋が流出してしまった西條嘉吉氏と志田信一氏が駆けつけてくれたが、実はこのお二人は被災者であると同時に、写真展への出品者でもあった。また写真展に合わせて出版された写真集『生きる』にも両氏の写真が掲載されている。この事実により3.11問題の報道に関する特徴的な形を見ることが出来る。広く一般的な言い方をすれば、世の中には時代や社会を記録する側の人間と記録される側の人間がいる。多くの場合、ジャーナリストや写真家、映像作家、作家などが記録する立場にいるわけだが、3.11に関する報道や表現行為の場合、写真のネタとポジのように表裏一体となっているケースが目立った。先に述べた西條氏は、被災者であると同時に記録し報道する立場にもあった。眼前に迫った津波の様相を、死の恐怖と闘いながら撮影した写真は、今回の写真展でも大きく展示された。また志田氏の震災以前の明るく活気に満ちた東北を写した写真は、写真展を観た多くの人々に希望と勇気を与えた。この例に限らず、震災で家を失い家族を失った状況にある写真家や一般の人が、厳しい状況に負けず、目の前の事実を自分の最良と思われる方法で記録し多くの人に伝えている。

地域の写真家の存在

今年度の講談社出版文化賞を、写真集『南三陸から』で受賞した佐藤信一氏は、宮城県南三陸町で生まれ親子二代、三陸町で写真館を営んでいたが、大津波で自宅と写真館を失ってしまう。唯一手元に残ったカメラで悲惨な状況にある南三陸町の記録を撮り続け、その成果である写真集で受賞するこ

とになった。かなりの数にのぼる3.11関係の写真集の中では、シンプルで小振りな写真集は目立たないが、被災者である佐藤氏自身の目を通して捉えた苛酷で厳しい情景や、復興に向かって歩み始めた人々の、非日常の世界から日常性を取り戻しつつある姿がリアリティの強い眼差しで捉えられていて心を動かされる。

佐藤氏と同様、地元宮城の女川で父親の代からの写真館の三代目にあたる鈴木麻弓氏の、佐々木写真館も被災した。そのうえ父母も失うという最悪の悲劇に出会っている。被災したのを機に写真館を止める決心をしたが、由緒ある佐々木写真館を潰すのは勿体ないという周囲の声と励ましもあり、せめて写真集の中にその名を残したいということで『女川 佐々木写真館』という写真集を作った。持ち前の頑張り屋の精神と、心の中で両親に「写真家として生きていく」と誓ったことが、人生の転機になったようだ。他人から見れば大変困難な状況にあるように見えるが、それでも得たものの方が多く、喜びの一年だったと言い切る。写真集の中には、父親がスタジオで撮影した「二十世紀の医者」の重厚なポートレート作品が掲載されている。

東日本大震災の一連の報道の中でもう一つ特徴的なことがある。それは地域の自治体や小さな新聞社が独自の取材・発表活動をするなど、従来の大新聞社や出版社による記録写真集の出版という枠組みを超えた活動が見られた点である。宮城県宮古市の広報誌の写真特集『津波』は、サブタイトルに「宮古市の被災記録と復興への一歩」とあるように、取材範囲を宮古市に限っている。A4サイズの50ページほどのパンフレットを少し厚くした程度の小冊子だ。値段も200円という新聞2日分ほどの安さだ。しかし内容は、空撮の写真を多用し、地域の人や漁業組合などが撮影した臨場感溢れた迫力のある写真が、誌面一杯に使われている。巻頭の天皇、皇后が避難所を訪れた情景の写真から始まり、磯鶏、鉾ヶ崎、高浜、津軽石の他、総延長2,433メートル、海面からの高さ10メートルに及ぶ大防潮堤もなすすべもなかった田老地区の空撮など、7地区の災害の「その時」の詳細な状景を生々しく捉えた質の高い写真が満載されている。また社屋が被害に遭い、通常の新聞が発行出来なくなった石巻日日新聞が、号外という形で発行した新聞は、被害状況をいち早く詳細に伝えたことで、地域住民の被害の縮小と行動に大きな貢献をもたらした。

多種多様な写真集

3.11関係の写真集の中で、子供にテーマを絞ったのは写真家・長倉洋海氏の『だけど、くじけない』だ。タイトルに長倉氏の想いと願いがこもっていて、明るい笑顔の少女の表紙とぴったり合っている。内容は厳しい生活環境にもめげない子供達の笑顔が中心だが、子供達の「言葉」を数多く取り上げているところに特徴がある。「ほくは津波に『バカヤロウ』と言いたい」「あたり前のことが、あたり前でなくなりました」「これからもずっと放射能汚染という恐怖と戦わなくてはなりません」「このしん災で、とても深い『ありがとう』を知ったと思います」といった言葉の数々が写真と共に強く心に残る。

日本の農業問題に長く係わってきた橋本紘二氏の『3.11 大震災・原発災害の記録』は、地震と津波による被災の姿をリアルに伝えると同時に、放射能汚染の被害を強く被った農村、特に計画的避難地域に指定された福島県下の酪農家の惨状を詳しくルポしている。狭心症のためニトロ薬を服用しての撮影は大変だったようだ。長野県栄村の傾いた家に張り出されていた「我ら相寄り村を成し」の布看板に農家の人の村を想い人を想う心が痛いように感じられる。齋藤亮一氏の写真集『佳き日』には、被災地の直接の痕跡は見当たらないが、美しい桜を始め春夏秋冬の豊かな自然や人々の暮しの姿から、被災地の明日が見えてくる。改めて普段着の日本の持つエネルギーを感じた。

3.11を通して社会を、人間を考える

東日本大震災の報道が、発生直後の被災地の詳細から、福島原発による放射能汚染の問題に急速にシフトしていったのは、事の重大性から言って当然だろう。しかも政府や東電の真実をなるべく隠そうとする隠蔽姿勢から、汚染の実態がなかなか分かり難かった。原発から半径20キロ圏内の双葉町や浪江町から住民が避難させられ、付近一帯が立ち入り禁止に指定されたため、なお一層情報が伝わらず、人々を不安に陥れた。そんな状況の中で、一部のフォトジャーナリストが警戒区域に潜入し、少しずつだが実態が浮かび上がってきた。写真家の太田康介氏は警戒区域に放置された生き物の姿をテーマにした写真集『待ちつづける動物たち-福島第一原発20キロ圏内のそれから-』を出版、牛や豚、鳥、犬猫の悲劇的姿をリアルに捉えている。市街地の真中に呆然と立ちすくむ駝鳥の姿がシュールで印象的だ。また八木澤高明氏は『フクシマ2011『沈黙の春』異形化する動物たち-』を出版し、動物の世界を通して人間世界に警鐘を鳴らしている。

警戒区域に指定された福島県双葉町、富岡町には人の姿が消え、犬や牛など動物がさまよっているだけだが、季節になると美しい桜が咲き、街全体が暗く沈んでいる中で其処だけが明るく光っていたという。そうした警戒区域の桜を中心に、被災地の過酷な光景や、明るく生きようとしている被災者の



姿を追っているのが鴨志田孝一氏の『希望の桜』だ。

被災地の桜に、このさき4年は語り継いでほしいという願いをこめた大沼英樹氏の『4年桜』は、桜に託して日本人の心情を深く語っている。原発と汚染の問題については、広河隆一氏や樋口健二氏、森住卓氏、本橋成一氏らが、多くの人が未だ原発問題に早い時期から、長い時間をかけ取り組んでいるので、その著書や写真集に詳しい。

鷺尾和彦氏の『遠い水平線』は、写真展のカタログというスタイルの故もあって、今回取り上げた3.11関連の写真集の中では、最も頁数の少ない(約20ページ)秘やかな出版物だが、白黒写真による一見寡黙な画面から伝わってくるものは多い。被災地の情景から、実際に起こったことの痕跡を丹念に拾い上げ語っている。現実と同じ時間、同じ場所を共有することで、自分自身の存在を確認し、起こったことと自分との関係を探っている。鷺尾氏の写真は、池澤夏樹氏のエッセイとコラムを構成した『春を恨んだりはしない』という作品の表紙をはじめ十数点使用されている。「震災の全体像を描きたかった」という池澤氏の意味を受け止めた写真で想像力に深みと幅を加えている。

写真家として、或いはフォトジャーナリストとして、日頃社会性の強いテーマに取り組んでいる様々なジャンルの写真家が、それぞれの枠を超えて3.11の事象にに取り組んだ。篠山紀信氏や石川梵氏の表現力や訴求力に富んだ大型の写真集を始め、生きることの素晴らしさを表現したハービー山口氏の『HOPE311』、自衛隊や海上保安庁の活躍ぶりを記録した写真集、さらには宮古市の広報誌の写真特集号まで多彩だ。日本の写真史上、社会史上、これほど多くの写真家、フォトジャーナリストがひとつのテーマについてジャンルを超えて多種多様な写真集を出版したことはなかったと思う。今回、本稿で取り上げた写真集は、定価が安く設定されている(1,000~2,000円前後)。より多くの人に見てもらいたい、考えてほしいという写真家の意思が強く伝わってくる。

この大震災と原発の問題を通して、科学技術の発達と人間の生き方とのアンバランスな関係がもたらす危険性と、日本人のこれからの生き方や考え方、さらに人間にとっての生と死について、深く考えさせられた。